

口頭発表「東京の学童クラブでのモルモット飼育と子どもの変化」

中野 祐樹



1 2010年度 年間指導計画

私達NPO法人子どもアミーゴ西東京では毎年、その年の子ども達の様子等を職員間で共有しあい、そこから生まれてくる課題と、職員自身が子どもの頃どんな事に励まされ、支えられ、そこから目の前の子ども達に伝えたいことを、年間テーマとして話し合います。

私がいた学童クラブでは、正規職員計4名で2010年度をスタートさせました。その4人で年間テーマを考えた時、いつの間にか自然と共有していた、子ども達と生活する上で大事にしたいことがありました。それは…「大人も子どももこれから生きていく中で、つらい事があった時、寂しさを感じる時に求められるのは、弱い自分を受け止め、そっと寄り添ってくれる人、そして仲間の存在なのだろう。しっかりと自分を受け止めてもらって安心し、また元気を取り戻すから人は前に進めるのだと思うのです。その自分をまるごと受け止め、そっと寄り添い、そして支えてくれる存在。つまりくとなりのトトロ>のような存在を子どもの中での生活やあそびを通して、仲間の中や自分自身の中に見つけてほしい。」そうした私達指導員の想いで生まれたのが、2010年度年間指導計画「トトロを探しに行こう！」なのです。飼育活動への取り組みは、この指導計画を作成していく中で取り入れられました。

2 荒れた子ども達と守るべき存在（本を一日中読む一人の女の子）

飼育をしたい！私がそう思ったのには、臨時職員として勤務していた中での子ども

達の言動にありました。「死ね！」「うざい！」「消えろ！」そんな言葉が当然のように飛び交い、女の子相手に殴る、お腹を蹴るのは当たり前、理由は「邪魔だから」「目障りだから」…私自身、金属のヤスリを「殺してやる」と言いながら向けられたこともあります。

ある日、学童に来るとカーテンの後ろにさっさと本を持って隠れる子に気付きました。近寄ると「来るな！」と言い放ち、より姿を隠します。その子はアスペルガー症候群のMちゃんで、日常行われている暴力の被害に遭う一人でした。そんな子ども達の姿を見た時「この仲間達を攻撃対象にするのなら、逆に守りたいと思うものはあるのだろうか？自分達は何に守られてるんだ？」と疑問を抱くようになりました。

そして迷いの中で正規職員となった私は年間テーマを考える中で、小学生の頃の自分を思い出しました。学校でケンカし、泣きながら家に帰ることがよくありました。しかし、気付けばまた、笑顔の自分を思い出すのです。泣きながら家に帰り、部屋に閉じこもっていると「シャー…シャー…」とドアを擦る音が聞こえます。ドアを開けると、当時飼っていたネコが部屋に入り、膝に乗ってきます。そのネコとの思い出と記憶を辿り「あの子達にも命の温もりを伝えることが出来れば、何か変わってもらえるのでは？」と考えたのです。そして職員間で飼育の話が進む中、カーテン越しにMちゃんに声を掛けます。「何か動物を飼いたいなあと思ってるんだけど、興味ない？」すると、「え！？何々！？何を飼うの！？」と初めて見る笑顔と共にカーテンから出てきました。「まだ決まってないんだけど、Mなら相談に乗ってくれるかなあと思って…」と言うと「わかった！じゃあ調べてくる！」と、話してくれました。すると次の日「中野！見てみて！ハムスターはね…」と、学校にあるハムスターの本を全て借りてきてくれたのです。Mちゃんの中でハムスターを飼うと決まっていたようです。そして巣の形状・エサの種類等、様々な知識を蓄え全て報告してくれました。Mちゃん

のその姿が指導員及び、当団体理事との打合せにて、飼育活動の容認を得る後押しになりました。

3 飼育部長、課長、係長！？（認め合い始める子どもの姿）

こういった経緯の中、中川先生のご指導の下に始まった子ども達とのモルモット二匹の飼育活動。まずは二匹に名前を付けることから始まります。たくさんの候補の中決まった「ルル」と「しずき」。翌日、出勤すると「飼育係作ったの？」と指導員仲間から聞かれ、何のことかわかりませんでした。子ども達が学校から帰ってくるとその疑問はすぐに解決されます。KO君、Mちゃん、KK君の三人が自主的に係を立ち上げ、それぞれ飼育部長・課長・係長として協力してエサをあげてくれたり、声を掛け合いながら掃除をしてくれていました。「カーテンの中にMがない…」それだけでも驚きましたが、それだけではありません。Mちゃんに対して殴る、蹴るを頻繁に行っていたのは、このKO君と、KK君なのです。「え、Mこれどうすれば良いの？」「エサどれくらいあげる？」「M、M…抱っこさせて…」戸惑っている男子に向かって「仕方ないなあ…」と、笑顔で助けてくれるMちゃん。これまでの姿とのあまりの違いに違和感を感じながら、とても嬉しかったことを今でも覚えています。

4 技と技のぶつかり合い「あそびの大会」（女の子の涙と、仲間の励まし）

夏休みに入り、毎朝、班毎にローテーションで学童中を掃除する時間を設けていました。その中に「ルル・しずきの家」の掃除もあります。子ども達が抱っこして撫でてあげたり、エサをあげたり、うんちを全部キレイに手で片付けたりするようになり、朝だけでなく、気付いた時に掃除をしてくれたり、水を交換してくれる子どもの姿が一年生から四年生まで学年関係なく、多く見られるようになりました。そんな中、四年生のS君の班が「ルル・しずきの家」の掃除当番になりました。S君はガキ大将。掃除をした場面を見たことがなく、いつも様々な場面で私達指導員とバトルする野球少年。その子に対して恐怖すら感じる子もいました。しかし、いざ掃除！となった時、モルモットの目を見ながら微動だにしないS君。周りにいた子も「あれ？」と異変を感じ近づいてみると、顔を赤くし、とても

緊張している様子です。「どうした？」と聞いてみると、とても小さな声で恐る恐ると「お、俺…触ったことまだねえよ？どうやって掃除したら良いんだよ！」と、ビビっています。「じゃあまず抱っこしてみるか??」と聞くと「コクッ」と黙って頷きます。その姿を隣で見た二年生のRちゃんが笑顔で「じゃあ私達がSに教えてあげるよ！」と言ってくれました。私はその場を子ども達に任せ、少し離れた場所から様子を見守っていました。すると、体がガチガチに固まったまま、でも絶対に目は逸らさないで二匹の顔を見つめるS君の姿がありました。その顔は固まったまま、でもとても穏やかで、周りの子ども達からも安心が伝わってきました。そして、結局掃除はせず、ずっと抱っこしてその時間を過ごしました。

又、夏休みの最後には「あそびの大会」という班対抗の子ども達だけでなく、大人も大声を張り上げて盛り上がる企画があります。競技が始まる！と思ったその時、二年生のSHちゃんが一人泣いているのに気付きます。元々寡黙な女の子でしたので、理由は全く話せず…そこで、他の指導員がSHちゃんの膝の上にルルを乗せ、様子を見ます。すると、少しずつ、少しずつ落ち着きを取り戻し、泣き止んでいきます。SHちゃんの涙の理由は「私が入ると弱いから負けちゃう。みんなに迷惑だから…」それを聞いた四年生のR君はすぐさま「大丈夫だよ！絶対負けない。俺達が頑張るから！だからやろうよ！」「そうだよ！みんなでやろうよ！一緒にやってみよう？」その班にいた仲間達みんながSHちゃんに想いを寄せ、励まします。そして競技へと戻ります。競技が始まるとその班はみんな必死です。きっと「SHちゃんの想い」に応えようとしてくれたのでしょう。その想いは、なんと、班を種目優勝へと導きました！SHちゃんは満面の笑みで仲間達とHi-touch！仲間達と一緒に笑顔で喜ぶ姿は、まるで青春ドラマを見ているかのようでした。

5 東日本大震災の発生（子ども達を支えてくれたルル、しずき）

ルル、しずきと共に過ごしたこの年、四年生達が学童を卒業する卒所式の準備中、あの「東日本大震災」が発生しました。子ども達は怯え、お母さんを心配して泣きだす子も出てきます。しかし、そんな時にもル

ルとしずきは子ども達の膝の上でじっと向き合ってくれました。どうしようもない不安や恐怖は、ルルとしずき、二匹の存在によって和らげられていきました。「ルル、しず、ありがとう…」子ども達から自然と出てくるその言葉が、二匹の存在の大きさを感じさせてくれます。

6 夏、冬、春休み中の「ルルとしずきのお泊り会♪」（指導員と各ご家庭との心の交流）

夏休みや冬休み等の長期休みの時期「二匹と子ども達との関わりをもっと深めたい」という想いで、希望する子どもで保護者の方よりOKが確認された場合、二匹を連れて帰れる「お泊り会」を実施しました。その中である四年生のお母さんから次のような連絡帳を頂きました。

「昨日はルルとしずきを連れて帰らせて頂きありがとうございます。連れて帰るなり、エサのあげ方、抱っここの仕方、掃除の仕方まで熱心に子どもに説明されました。エサをあげる時にどうしたらエサが汚れずに食べられるか、どんなエサが好きなのかなあ？等、お泊り会をきっかけに、家族みんなで一つの話題を楽しみながら話すことができました。ありがとうございます。また機会があれば是非連れて帰りたと思っています。」

この記載があったことは私達にとって大変驚くべきことでした。このお母さんは当時、学童に対して不信感を抱いており、何をするにも否定的な捉え方をされていたからです。又、他のお母さんからは、「家に連れて帰ると、ずっと笑顔で抱っこをして過ごし、慣れてない手つきで必死になってトイレ掃除等のお世話をしていました。宿題はやれてません。」という内容や、「なかなか動物を飼いたくても飼える環境ではなかったので、お泊り会をやってもらうことで、子どももとても喜んでいました。」とのお便りを頂きました。

お母さんの学童への理解は子どもに伝わり、指導員と子ども、指導員と保護者の方々、子どもと子ども、そして、子どもとお母さんとの関係に変化をもたらしました。これまで中々勉強のこと以外で話す時間がなく、その寂しさを学童でイライラとして発散させていた子。指導員にまとわりつい

ていた子。

7 輝く笑顔と共に、学童を卒所していった子ども達（今でも私達指導員を支えて下さっている保護者の方々）

そんな子ども達が、一つのおそびを学校から帰ってきてからすぐにみんなを始め、帰るまでずっと続ける。それも、そこには前年度までカーテンの後ろに隠れ、存在を隠していたMちゃんの姿もあります。さらに横にはMちゃんに対して暴力をふるい続けていたKO君とKK君の姿。この三人だけではなく、たくさんの仲間達と、一緒になって声を精一杯出しておそびを盛り上げ、喜び、笑い、涙し、支えあい、当時の四年生はみんな揃って最高の笑顔と共に卒所していきました。

時間が経つにつれ変化していく子ども達の姿を感じ、私達を応援して下さる保護者の方々も増えていきました。特に、当時四年生T君のお母さんをはじめ、多くのお母さん方が、子ども達の関係の変化をもの感じ、卒所した今でも、私達指導員を支えて下さっています。又、このお母さん方の呼び掛けにより開催された2011年の忘年会に行ってみると、そこにはMちゃん、KO君にS君等、その当時の仲間達が五年生になった今でも、お互いの存在を否定するようなことなく、認め合い、笑い合い、真冬に外で鬼ごっこをして、たっくさんの光る汗を流して遊んでいました。すでに卒所した子ども達。でも、みんなの中で一緒に遊んでいるMちゃんの姿を見て、思わず涙が出そうになりました。

「ルルとしずき」この二匹の存在は、Mちゃんをはじめ、子ども達にとってトトロのような存在となり、同時に、そこにいた仲間達がお互いにトトロのような存在になれるきっかけを与えてくれたのかもしれない。ルル、しずきと、飼育活動と一緒に積極的に取り組んでくれた指導員の仲間達、そして、子ども達の変化を見守り、私達指導員と今でも交流し励まして下さっている保護者の方々への感謝の想いは忘れません。

(NPO法人子どもアミーゴ西東京
学童クラブ指導員)